

夢中になって遊ぶ姿から見える科学する心



社会福祉法人 長尾会 第2長尾保育園

研究代表 山本あずさ 執筆代表 岡山 愉子

目 次

はじめに	．．．．． P1
0 歳児事例	．．．．． P2
「やった！できた！見つけた！～やってみたい遊びを大切に～」	
1 歳児事例	．．．．． P5
「見つけた物、どんな風に転がる？」	
2 歳児事例	．．．．． P8
「ケーキを作りたい！」	
3 歳児事例	．．．．． P11
「色水遊び～すりすりっておもしろい！～」	
4 歳児事例	．．．．． P14
「作った物が繋がった！	
～イメージを共有することで新しいひらめきにワクワクする～」	
5 歳児事例	．．．．． P17
「つながる遊び～本物みたいに作りたい！」	
全体的な考察	．．．．． P20

はじめに

自園は大阪府枚方市にあり、近隣には田んぼや畑、川があり、白鷺や日本カメの歩く姿をよく目にする。自然を身近に感じ、「個々の自立支援」「個々の自律支援」「共育ち支援」という理念に基づき、「正しい判断ができ、人間性豊かな子ども」「自立心があり、創造性豊かで協調性のある子ども」「感性豊かに五感を感じる子ども」を育む保育を目指し、保育目標に取り組んでいる。

「科学する心を育む保育」に取り組み、8年目を迎えるが、1年目は科学する心を育む保育を自園では、「不思議・発見・探求心」と捉え保育に取り組んできた。さらに2年目では、「五感を感じる」保育を大切に「不思議・発見・探求心」の中には子どもの気づきがたくさんあるということを発見した。3年目以降では、その気づきを「不思議・発見・探求心」と分類わけを行い、「6つの気づき」が生まれた。また、4年目以降には「気づき」には感性が関係しているのではないかと考え、もともと持った感性が発揮される場面に出会った時、新たな感性が育っているのではないかと考え、「気づきの育ち」「感性の育ち」に着目した。すると、その感性は乳児期から育まれていることがわかった。

また、昨年度は、「6つの気づき」に戻り、職員間で何度もクラスのエピソードを用いて話し合いを重ねた。すると、子どもたちの遊びの姿や言葉を6つの気づきに分類していくと、「6つではなく8つの気づき」があるとわかった。

今年の8月、保育を振り返る際に、「保育者にとって楽しかったと思う保育はどんな保育だったか」話し合いを行った。すると「子どもたちと保育者が夢中になって遊んだこと」と多くの職員から返ってきた。そのエピソードを今年度の論文にまとめることにした。

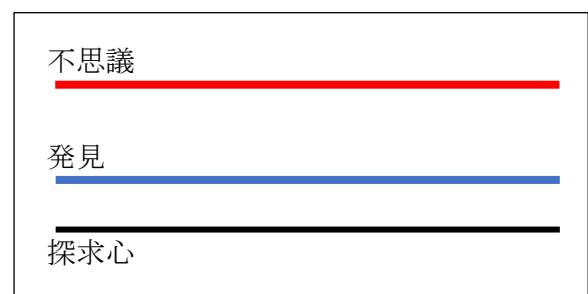
仮説

今年度は原点に戻り、本園が考える「科学する心を育む保育」とは、「不思議・発見・探求心」であるが、0歳児クラスから5歳児クラスまで保育者が子どもたちと一緒に楽しく、夢中になって遊ぶ中に「不思議・発見・探求心」は含まれているのか検証する。

そこで乳児期は一人ひとりを丁寧にその個性や感性を大切に、そして幼児期はその感性や個性を協同性・社会性に繋げながら、「不思議・発見・探求心」を育む保育と捉え着目した。

方法

今年度の事例を書くにあたって、「不思議・発見・探求心」読み取りやすいように、子どもたちがどういうことを不思議に思ったのか、どんなことを発見したのか、どのように探求しているのか、どのように探求していたのかをできる限り文章で書くようにした。そしてその部分には、赤線・黒線・青線を引いて一目でわかりやすいようにした。



2019 年度 0 歳児事例「やった！できた！見つけた！～やってみたい遊びを大切に～」

第 1 章～入れ込みあそび～場面①「入るかな…？」

4 月下旬、手を伸ばして玩具を掴んだり振ったりして遊ぶ子ども達の姿が見られた。保育者が入れ込みあそびを始めると、子ども達も保育者の真似をして入れ込みあそびをする姿が見られるようになった。5 月上旬には、ミルク缶を使用した入れ込み玩具を作った。積み木やチェーンを持ってミルク缶に入れ込む様子が見られ、玩具を何度も出し入れして遊ぶ姿が見られた。特に写真の K 児は入れ込みあそびに興味津々で楽しんで遊ぶ様子が見られた。



ミルク缶を布で
覆い、子ども達が
安全に遊ぶよう
工夫した。



入った！



K 児

うさぎさん
食べるかな…



園庭でも同じ遊びが出来る様に手作り玩具を用意した。

保育者は「うさぎさんにどうぞしようね」等を声を掛けながら関わり、入れ込んで遊ぶ楽しさを言葉や表情で伝えていくようにした。口に入ったボールを取り出して保育者にボールを渡す等保育者との関わりも見られた。

場面①ではまだ玩具を握ったり振ったりして遊ぶ事が多かった子ども達が、ミルク缶を使用した玩具を作った事で保育者の真似をしたり自分で考えて入れ込みあそびが出来る様になってきた。

場面②「ボールが入ったよ！」

5 月中旬頃から戸外ではカラーボールと筒を組み合わせ、転がしあそびに取り組んだ。子ども達の座高に合わせ、筒が傾くように高さを調節し環境を整えた。最初は筒の入り口までボールを持っていく事が難しかったようだが、保育者と繰り返し遊んでいくと自分でボールを持ち筒に入れ込んで遊ぶようになった。場面①で行なっていたミルク缶を使った入れ込みあそびを経験した事が、今回の転がしあそびにも繋がったように感じた。



入るかな…？

入ったよ！



夢中になって遊ぶ姿が見られる様になってきたので室内だけでなく戸外に出た時も遊びを継続できないかと考え、場面②ではカラーボールと筒、段ボールで作った手作り玩具を用意し環境を整えた。初めはなかなか上手く筒に入れられず“なんでかな？”という表情をしながら何度も繰り返し遊んでいるうちに、筒にボールを入れていた姿を見て場面①でミルク缶を使って行なった入れ込みあそびが良い経験になっていたのではないと思う。

場面③「あっ！ここにも入った！」

繰り返し入れ込みあそびに取り組む中で、初めは指先も器用に使えず上手く入れ込めない子も多かったが、経験を重ねる事で徐々に集中して遊べるようになってきた。戸外で遊ぶ際も 5 月下旬頃から発砲スチロールの穴などに自らカラーボールを入れ込む姿が見られる様になり、自分で考えて遊ぶ事で今までに比べ少しずつ集中して遊び込めるようになっていくように感じた。

場面③では自らボールを入れられそうな場所を見つけ、考えて遊ぶ姿が見られた。

ここにも
入るかな…？



場面④「この中に入るかな？」

6月上旬になると今まで遊んでいた入れ込みあそびでは物足りなくなってきたようであり遊び姿は見られないようになったので、どうすれば子ども達が楽しんで遊べるかを保育者間で意見を出し合い、ミルク缶に段ボールで蓋を付け缶の中が見えないようにした。蓋には動物のイラストを貼る事で子ども達も興味を示してくれるように工夫をし、6月中旬に手作り玩具を室内に設置した。



蓋を開けると缶に入れられるようにした。また動物のイラストを貼る事で興味を持てるようにした。

K児：玩具にすぐ興味を示したが、最初は蓋を上手く開ける事が出来ず少し苦戦している様子が見られた。保育者：「うさぎさんとか、ぞうさんの所にどうやったら入るかな？」「お腹空いてるかな？」と保育者が言葉掛けを行なうと、K児が蓋の開け方に気付き、片手で上手く開けてミルク缶の中にガチャ玉を入れている。また、ガチャ玉を入れた時に鳴る音が面白かったようで何度も繰り返し入れて遊ぶ姿が見られた。

《振り返り》

一度やり方が分かると集中して遊べるようになり、高月齢児（K児）は一つ玩具をミルク缶に入れると一度蓋を閉め、もう一度蓋を開けた時に玩具が入っているかミルク缶を覗き込んで確認するなど楽しんで遊ぶ姿が見られた。今までは、片手だけで入れ込みあそびを楽しむ事が多かったが、少しずつ両手を器用に使えるようになってきた事であそびの幅も広がり、遊び方にも変化が見られるようになってきたと感じる。また、ガチャ玉だけではなくチェーンやホース積み木等、保育室にある様々な玩具を入れてみようとする姿も多く見られる様になり、どんな大きさの物が入るか、入れた時にどんな音が鳴るか等子ども達なりに考え、発見を探しているようであった。



開けられた！

このおもちゃも入るかな？

K児

場面④では、ここまで夢中になって遊んでいたもので何か工夫は出来ないかと保育者間で話し合い、ミルク缶に段ボールで蓋を付け中が見えないようにした。初めはなかなか上手く蓋を開けられずにいたが一度やり方が分かると夢中になって遊び、高月齢児は蓋を開け閉めし、中身が入っているかミルク缶を覗き込んで確認するなど楽しんで遊ぶ姿が見られた。初めは上手いかな遊びでも繰り返し遊ぶ事で遊び方を理解し、自分たちで工夫や試行錯誤しながら遊ぶ中で“出来た！”という喜びの表情をたくさん見ることが出来た。

第2章～引っ張りあそび～場面①「引っ張るって面白い！」

5月中旬からは、指先を動かして楽しめるあそびを取り入れた。段ボールと紐を使用し、紐を引っ張ると伸び縮みする玩具を作り、保育室に設置した。段ボールで隠れている紐の先には鈴をつけて引っ張ると音が鳴るようにしたり、ガチャ玉の中に紙粘土を入れて重りを付け、紐を引っ張ってもすぐに紐が戻ってしまうようにするなど、工夫し音や重さも感じられるようにした。玩具を出した当初は、まだ指先を使って上手く紐を掴めない子もいたが、何度も繰り返し遊ぶ事で指先も器用に動かせるようになり、親指と人差し指を使って紐を引っ張る姿が見られ、引っ張った際に音が鳴った事に気付くと「おっ！」という表情をしたり、重みで紐が戻ると不思議そうな表情を見せる子もいた。

紐を掴みやすいように、紐の先に結び目を作り、工夫をした。



N児

場面①では引っ張りあそびに取り組んだ事で指先の器用さが少しずつ発達していく姿が見られた。紐に鈴や重りを付ける事で音や重さも感じられるように工夫をした。

場面②「これなあに？」

5月下旬になり今までの引っ張りあそびの経験を活かす事は出来ないかと考え、保育室にスズランテープを吊るし、引っ張って遊べる環境を作った。初めは**ぶら下がっているスズランテープを不思議そうに見ていた子ども達だったが**、保育者が一度引っ張って見せると興味を示し、**手を伸ばして引っ張ろうとする姿が見られた**。また、子ども達が引っ張りやすいように風船や布製の音が鳴る玩具を付け、「触ってみたい！」「引っ張ってみたい！」という意欲を引き出せるようにしたり、届きそうで届かない高さに吊るす事で、運動面の発達も養えるような工夫を行なった。



場面②では天井からスズランテープをぶら下げる事で指先と同時に足腰の力も養えるようにした。

第3章「引っ張ったら落ちてきたよ！」

K児やN児の姿から入れ込みあそびや引っ張りあそびの中に、指先の発達や足腰の力の強化、自分なりに考えて工夫しながら遊ぶ姿が見られ、何より子ども達が夢中になって何度も繰り返し遊ぶ姿が見られる様になったことが印象的であった。そんな子ども達の姿を受け、これまでのあそびを何か発展させることは出来ないか保育者同士で意見を出し合い、6月上旬保育室の天井にネットを掛けそのネットの上に風船や紙風船、鈴を入れて作った折り紙のボール等を入れ、ネットに付けたスズランテープを引っ張ると風船などが落ちてくるようにした。翌朝子ども達が登園するとすぐ**室内の変化に気付き興味を示しスズランテープを引っ張って遊ぶ姿が見られた**。初めはただ引っ張って遊ぶだけで、風船などにはなかなか気づいていなかったが**繰り返し引っ張る事でネットが揺れ、反動で偶然風船が落ちてくると嬉しそうに「おー！」と声をあげ、それ以降は上を見上げながらスズランテープを引っ張り、風船の揺れや鈴の音を気にしながら遊ぶ姿が見られた**。

月齢によってつかまり立ちが出来る子もいれば、まだ腹ばいしか出来ない子もいたり、発達はそれぞれ個人差がある為、全員が楽しめるようにスズランテープの長さを調節する等、環境構成を考えた。その結果、様々な月齢の子が興味を示して遊ぶ事が出来ていたので、少しではあるが子ども達のあそびの幅も広がったのではないと思う。また、場面②では膝立ちをした時に届く高さでスズランテープを吊るしたが、場面③では個々の発達に合わせて様々な高さで吊るし、芯材に毛糸等を巻いて素材の感触を楽しむように工夫した物をスズランテープの先に付けた事でより興味が持てた。



第3章では今まで以上に足腰の力を養う為に遊びに取り入れられないかを考え、ネットに様々な長さのスズランテープを付けた事で今まであまり積極的につかまり立ちをしなかった子も自分でスズランテープを引っ張りたいという意欲から、自ら手を伸ばしたり膝立ちやつかまり立ちを積極的にする姿がたくさん見られる様になった。

【考察】

0歳では、不思議・発見・探求心の中で発見が一番多く見られた。まだ言葉では表現出来ないが初めて出来た時や何かを発見時の“やった！”“出来た！”“見つけた！”という表情から、夢中になって遊んでいく中で新しい発見をし、少しずつあそびが発展していく事を感じたので引き続き子ども達が夢中になり、集中して遊べるあそびや「やってみたい！」という意欲を引き出せるような遊びを取り入れていきたいと思う。

1歳児事例「見つけた物、どんな風に転がる？」

きっかけ 進級し新しい担任とも少しずつ愛着関係が育まれてきた頃、園庭での探索あそびでは様々な自然物に触れる機会や、生き物にも興味を示すようになってきていた。探索活動で見つけた物を嬉しそうに保育者に見せる姿や、簡単な言葉で見つけたことを一生懸命伝える姿が見られた。また、見つけた物を自らカップ等に保管する姿が見られたので、見つけた物を保管できる、自分だけの特別感を味わえるよう、子どもがシール貼りをして作った探索バッグを持っでの探索活動が始まった。(4月下旬)

場面①「梅の実を見つけたよ！」

“自分だけの”という特別感を持った探索かばんに喜び、見つけた草花や実を大事そうに集めている。ある日園庭の梅の木の下で梅の実を見つけたAちゃん。ままごとコーナーに移動し、以前からよくペットボトルに砂を入れたりして遊ぶ姿が見られていたので、ペットボトルに水を張り、水に浮かぶ梅の実を観察できるように環境を整えた。(5月上旬)

場面②「こうしたらどうなる…？」

早速、水の張ったペットボトルに気づいたAちゃん。梅の実をペットボトル口に入れようとするも入らないことに気付いた。その様子を見ていた保育者はままごとコーナーにあるまな板と包丁を用意した。

保：「Aちゃん、こんなのもあるよ！」と伝え、保育者が用意した用具に興味を持ち梅の実を切り始めた。



梅の実を発見！



どうして…

入れようとしたけど
入らない…



よし、切ってみよう！



振り返り

場面①、②では、マイバッグを保育者が用意したことで園庭での探索活動がより一層子ども達の興味や発見へとつながっていった。マイバッグを持って探索活動を楽しむことで園庭に咲いている草花や梅の実をよく探したり、マイバッグに自然物をたくさん集めることに喜びを感じていた。また、「これなに？」、「こんなのあった！」と子どもなりに発見したことを言葉で伝え、保育者や他児と見つけた物を共有することを楽しむ姿も見られた。自然物を発見し、保育者が用意した環境に気づき、子どもなりに探求したり、保育者のさり気ない言葉掛けに興味や期待を持っていた。ペットボトル口に梅の実を入れてみようとするが、入らないことに気づき保育者が用意したまな板や包丁を使って実を切り始める子もいた。

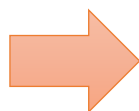
場面③「あれ？色が変わったよ！」

Aちゃんの遊ぶ姿から次第に他の子どもたちも真似をして同じ遊びが始まった。梅の実以外にも探索活動で見つけた花びらを入れたりするのが大好きになっていた。そこで保育者はさらに色を付けるとどうなるのかを考え、再度環境を整えた。水に食紅を入れると少しずつ色の変化にも気づき始め保育者と一緒にペットボトルを振ったり、その様子を見ていた子どもたちは自らペットボトルを振り色の変化を楽しんだ。また、色の付いた水をジュースに見立てて、簡単なジュースあそびや、お友だちや保育者にジュースを注ぐことに遊びが変化していった。(6月初旬)



どうなるんだろう…

探求心



色が変わった！

発見



私も入れて！

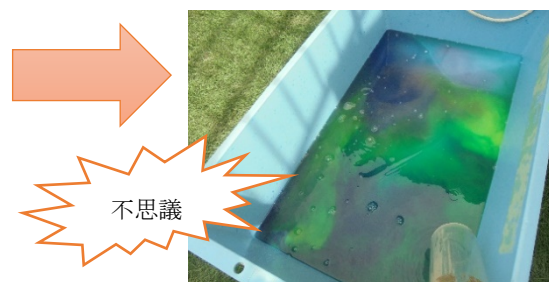
いーいーよー

場面③では、Aちゃんの遊ぶ姿から次第に真似をして同じ遊びを楽しんだり、梅の実や花びらを浮かばせて「綺麗」と浮かんでいる水面をじっと観察する様子も見られた。また、色が付いたことで見立てあそびにも広がり、子ども達同士でジュースとして見立て、注ぐことを楽しんだり「はい、どうぞ」、「ありがとう」等と言葉のやり取りも楽しんでいた。最初は透明の水から、梅の実や花びら、また食紅を入れることで色が変わり、子どもの「なんで？」と疑問に思う心が芽生えた。

振り返り

場面④「色水あそびから流しあそびへ…」

色水あそびを通して色の変化を楽しんだり、ジュースあそびでお友だちにジュースを注ぐことを楽しんでいた子ども達。色の変化を楽しむ姿からなにか他に遊びが展開しないかと子どもの視点から環境を捉えることにした。そこで樋や透明の筒を用意し、色水を流し、色が混じり合う変化を発見できるようにした。(6月中旬)



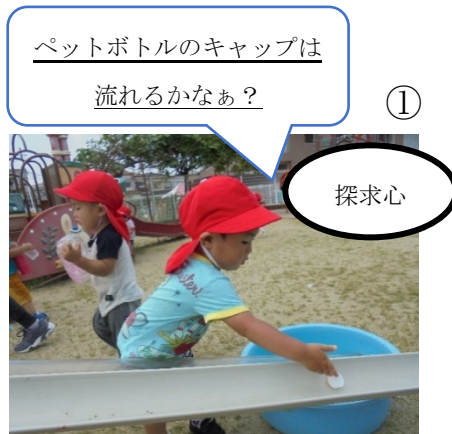
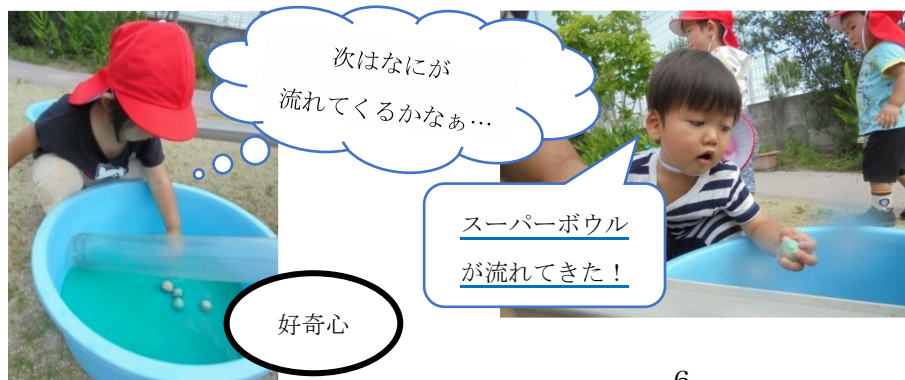
色水を樋や筒に流すことを楽しむ子、流れてくる色水を観察し色の変化に気づき子どもなりに“なんでだろう…”と不思議に思う姿が見られた。

振り返り

場面④の色水あそびでは、色水を流すことを楽しむことから次第にタライの中で混ざり合う色の変化を楽しんでいた。子どもなりに感じたことを言葉ではまだあまり上手く表現できないが、表情やタライの中をじっと見つめるなど行動を通して不思議に思う気持ちが読み取れた。

場面⑤「こんなものも流してみたい！」

遊びが進んでいく中で色水を流すだけでは物足りなくなった子ども達。そこでスーパーボールや草花を用意し、色水と一緒に流すことができるように子ども達の目のつくところへと用意した。するとそれに気付いた子ども達は次々にスーパーボールや草花を流し始め、水と一緒に流れる面白さを感じていた。流すことを楽しむ子、流れてきたものを集める子など一人一人遊び方は異なったが、興味を示し活動に取り組んでいた。また、Bくんは身近にペットボトルのキャップがあることに気づき、流すことを楽しんでいた。水と一緒に流すと勢いよく流れていくことに対してキャップ単体では上手く流れていかないことを不思議に思っていた。その様子を見ていた保育者はその後のBくんの様子を観察していると、Bくんは手でキャップを押して転がし始めた。Bくんの姿から周りの子ども達も真似てペットボトルのキャップも流すことを楽しみ繰り返して遊んでいた。①写真参照(6月下旬)



振り返り

場面⑤では遊びが進む中で、色水だけを流すだけでは物足りなくなり、保育者が用意した、草花やスーパールボウルを流し始めた。しかし子ども達は遊びが進む中で自ら“一緒に流れるなにか”を探し始め、Bくんはペットボトルキャップへと行きついた。水と一緒にキャップを流すと、よく流れるが、キャップ単体だと上手く流れていかないことにも気づき手でキャップを押したり、探求しながら遊ぶ姿が見られた。

場面⑥「どんな物が転がるのかなあ…？」

水あそびが始まり、水風船や氷など夏ならではの感触にもたくさん触れてきた。以前から流したり、転がしたりして遊ぶことが好きなクラスだったので、再度樋や筒を出すことにした。すると以前の経験を思い出し水風船を転がす子、ペットボトルを転がす子など子どもたちなりに“転がる物”を探し始める姿が見られた。Cくんは他児が水風船を転がす様子を見た後、近くにあったペットボトルを筒の中へと入れ始めた。水風船は勢いよく転がっていったにも関わらず、Cくんが入れたペットボトルは中々転がらない。不思議に思ったBくんは手を筒の中へと入れペットボトルを押し出すように転がした。(7月中旬)



振り返り

場面⑥では過去の経験から子どもなりに転がる物、転がらない物を区別し身近にある物を探し始め、自然と自分たちであそびを作り出す姿が見られた。自分たちで遊びを作り出すことで、「ああしたらどうかな？」、「こうしたらどうかな？」という探求心が芽生え、子ども達同士で試行錯誤しながら遊ぶ姿が見られた。

【考察】

1歳児クラスでは探求心が1番多く見られた。その要因として考えられたのは保育者が遊びの中に一緒に参加し、夢中になって遊びを繰り返す中で子ども達と一緒に発見したり、考えたり、子ども達の「もっとこうしてみたい！」という探求心が深まるような言葉掛けを行ったことが考えられると感じた。今後も子ども達の不思議・発見・探求心を大切にしながら遊びにトキメキが感じられるような環境や遊びを保障していきたいと思う。また、自ら“遊びを作り出す”楽しさを子ども達と共に共有していきたい。

2 歳児事例「ケーキを作りたい！」

「水あそびのはじめまして」 水あそびのはじまり

7 月 10 日

ある日、水あそびをしているうちに大きな水たまりが出来て、地面がぬかるみタプタプした感触のペースト状の泥ができた。しかしまだ、この頃は、泥で汚れることを嫌がる子どもが多く汚れたところはすぐに水をかけて流していた。



場面①「ケーキ屋さんのはじまり」 A 児・B 児のエピソード

7 月 24 日

地面がぬかるみ、足で泥の感触や泥水の温かさを感じ始めたことをきっかけに水だけだったのが泥にも興味を持ち始めた。次に地面の泥をスコップで掬ったりバケツに入れたりして手を使って泥あそびをするようになった。そこで A 児が泥をバケツに入れたことで、水分の多いペースト状の泥が表面張力になっていることに興味を持った。手でプヨプヨ、パンパン触り感触を楽しんでいたため保育者が「どう？気持ちいい？」と聞くと A 児は笑顔で「気持ちいい～」と答えた。感触を楽しんでいる最中に、保育者が「それは、何なん？」と聞くと「ケーキ！！」と感触を楽しみながら見立てあそびをしていた。

気持ちいい～



7 月 26 日

泥でケーキ作りをした A 児はこの日も泥でケーキ作りをしていた。2 日前は 1 人で遊んでいたが、A 児のそばには、A 児のあそびに惹かれた複数の子どもが泥でままごとを楽しむようになっていた。そこでは、主にスイーツ作りをしており、B 児がバケツに入った水分の多い泥を“ケーキ”、じょうろに入った水分の少ない泥を“チョコレート”と想像を膨らましながら、ままごと遊びを展開していった。B 児は店員さんになりきって、お客さん役の保育者に伝え「ケーキ屋さんでーす」「これはチョコレート」と見せた。

振り返り

場面①では、水を流し、たまたまできた地面の泥に A 児は興味を持った。足だけで感触を楽しんでいたが、それを手にしてバケツに入れて遊んでいたことが、ままごとあそびに繋がるきっかけとなった。ままごとあそびに行き着くまでも日常ではあまり感じることはないタプタプとした感触を楽しんでいた。最初は 1 人だけでしていたあそびが、他児も興味を持ち、あそびが周りに広がるとともに、あそびの質自体が深まった。また、B 児は水分の多い少ないということを理解しながら、ケーキとチョコレートに分類していた。そして、ただ作るだけでなく、大好きなお店屋さんごっこに自ら繋げていた。

場面②「こんな泥水が作りたい！」 C 児のエピソード

同日 7 月 24 日

地面の土や泥、泥の混ざった水をバケツに入れている間に、底に泥が沈殿して、C 児が思い描く泥水ができたことが A 児にとって初めての経験だったのか嬉しそうに持ち歩いていた。もう一度作ろうとしたとき、土をバケツに入れ、たらいに張っていたきれいな水を入れたがさっきのような泥水ができず悔しがり泣きそうになっていた。しかし、その後何度も泥と水を入れ替えているうちに思い通りの泥水にたどり着いた。満足そうな表情でバケツを持ち歩いていた。

7 月 26 日

この日もう一度泥水づくりに挑戦していた C 児は、バケツに土、泥、水を入れ、棒状の玩具でかき混ぜていた。



振り返り

場面②では、C児は、意図なく偶然できた泥水を目標に、自分一人の力で作ることが出来た。泥水を使う時ときれいな水で作る時では、出来方、作り方が違うことに気付いている様である。また、混ぜることで、泥水の色の濃度が出ることに気付いていたようだ。保育者はC児が思い通りの泥水ができず、悔しがっていることに対して“できないことをどのように乗り越えるのか”と気になり見守っていた。C児は泥や水を足したり、流したりしながら、一度も他人の力を借りずに自分の力で解決することが出来た。このことから大人が知っていることを全て言葉や行動にするのではなく子ども自身で考える時間や挑戦する機会を与えたいと感じた。しかし、全て見守るだけでなく、2歳はヒントになる道筋やあそびの広がる環境をほどよく作っていくことが大切であると感じる。

★見立てる力もついてきており、友だちと関わりながら遊ぶことの楽しさを感じられるように、ケーキ作りに必要なものを保育者間で話し合い、見立てて遊べるような素材として、様々な長さのストローやカップ、フライパン、おたまなどを用意した。



場面③「たんたんたんたんじょうび～」

8月2日

泥でケーキを作ると、ストローを見つけた子どもたちはケーキにさすことに夢中になった。沢山ケーキにさした後は、ふーっと息を吹いたり、「たんたんたんたん、たんじょうび～」と歌い始めたり、ろうそくに見立てて遊ぶ姿が見られた。C児はこの日も思い描く泥を作ろうとこだわっていたが、見立てて遊んでいる姿に、「Cちゃんも作る！」「ろうそくついたよ！」と、こだわって作っていた泥をケーキとして作ることに興味を持ち始めた。

★その日にどんな事をして遊んだか、子どもたちと振り返りをする中で、次回も“チョコのケーキ”を作りたいという声が上がった。「イチゴ乗せる！」「ぶどうも！」「こんなおっきいやつ！」と身振り手振りで懸命に伝える姿があった。「保育園にイチゴないで」の一声から、「どうしようか」と問いかけてみると、A児が「泥をぎゅっぎゅってしたらいいねん」と泥を手で握って固めることを思いつき、知らせた。誕生日会を楽しむところから、より自分が思い描く“チョコのケーキ”に近づけたいという思いが強くなっていくのを感じた。子どもたちの意見も受け、石けんの泡や、手だけでなく絞って形になるよう布なども用意しておいた。

場面④「ビスケットケーキ出来た！」A児・D児のエピソード

8月9日

(1)さっそく“チョコのケーキ”を作る子どもたち。しかし、なかなか思っているようなケーキにならず、「泥入れたらあかん！」と子どもたちで少し言い合いも見られた。そこで保育者が「どんなケーキを作りたい？」「どうなったらおいしくなるの？」と問いかけると、A児が「タプタプってしたらおいしくなるねん」「もっとお水（のちに、水たまりの緩い泥のことだと分かる）いれたらいいねん」と言った。今回ははじめに土を入れたため、思っているような固さのケーキにならずに苦戦していたのだった。それで納得した子どもたちは、水を汲みに行く子と、混ぜる子に分かれ、また一緒にケーキ作りを始めるのだった。保育者も水を一緒に汲みに行くと、「ここのお水がいいねんで！」と手招きして教えてくれ、ようやく子どもたちが思うようなケーキが完成した。



振り返り

場面③④ではさらにあそびが広がっていくのを感じた。(1)では、作り方を変えてみるが、思い描くケーキにはならず、苦戦する姿が見られた。これは、繰り返し遊ぶことを通して、こういうふうにしたいという思いが生まれてきたからこそこのつまずきであると考えられる。保育者の仲立ちにより、自分はどうかということと言語化しようとする姿が見られた。また、あそびを終え、どんなことをして遊んだか、次はどんなことをしたいか子どもたちと振り返ることで、次のあそびに意欲も見られるのを感じ、振り返りの大切さを知った。



振り返り

(2)では、あそびの中で、作りたいものがイチゴのケーキからビスケットを入れたケーキへと、変化はしていったものの、思いやイメージを形にする力が育ってきていると感じられる場面だった。また、トイレットペーパー粘土でクッキーを作った経験を思い出して、同じように、ペタンと手で丸く平らにしている。以前の経験から、子どもたちの中でビスケットの作り方を知っており、異なる場面でもやってみようとする姿が見られた。

(3)出来たビスケットをトレイの上に乗せると、泥が緩いため少しずつ流れていった。すると、「ああ、とけちゃった」と言った。「本当だね、とけちゃったね。」「どうしたらとけないんだろうね」と問うと、「氷入れたらとけへんと思う」と話した。ビスケットの形を保ちながら、先ほどのケーキに入れてビスケット入りのケーキが完成した。

振り返り



(3)は、ビスケットを作る中で出てきた、泥の流動を“とける”という言葉で表現したことも子どもらしい豊かな発想である。作ったものが“とけて”形が崩れていく様を見て、あれ？と不思議そうにし、その後はったように“とける”のは暑いからであり、“氷を入れるととけない”だろうと自信を持って答えている。生活の中での様々な経験が次のあそびに繋がっていることを感じる。

【考察】

タプタプした感触の泥は子どもたちにとって、新しい出会いであり、その“タプタプ”にこだわってあそびを広げていた中でのケーキ作りだった。“タプタプ”の不思議さをはじめに、今回の事例では、“発見”が1番多く見られたが、「こんなケーキが作りたい！」というイメージの元、2歳児なりに探求しながらケーキ作りを楽しむ姿が見られた。様々な経験を通して、子どもたちが「あ！いいこと見つけた！」という発見や驚き、2歳児なりのこれが良い！という確信や自信を持っているその心を大切に、より様々な経験が出来るようあそびを工夫していきたい。そのために、保育者は子どもたちの夢中な姿、不思議と感じる心や発見をキャッチし、次のあそびに繋げていくということを改めて丁寧に行っていきたい。

3 歳児 事例 「色水遊び～すりすりっておもしろい！～」

戸外遊びの際、春の動植物と関わり、遊ぶことが増えていた子どもたち。

園庭に生えている草花や落ちている木の実を型抜きしたものの上にのせたり、砂と一緒に容器に入れるなどしてままごと遊びに取り入れたり、見つけた生き物のエサにしたりと日常の中で子どもたちなりに様々な方法で取り入れる姿が見られていた。



4 月 26 日、そんな姿がよく見られる中で自らすり鉢とすり棒を持ち出して、園庭の隅に生えているクローバーをすりすりする一人の子ども(A 児)の姿が見られ、夢中になってすりすりする姿が見られていた。

こうやってしてたはず…

補足

他クラスの保育者にそのことを話すと 5 歳児クラスの子どもたちがすり棒とすり鉢を使って遊んでいる姿をじっと見ていた様子。その姿が面白いと感じたらしく、見よう見まねで実践していたようだ。

その後保育者が少し水を入れて見せると緑色の色水ができ「お茶みたい」と他児と言いついて嬉しそうにしていた。その後「違う色も作ってみたい」「違う色も出来るかな？」と話す子が数名おり、園庭に咲いているシロツメグサや、なっている梅の実を砂場用玩具の包丁で切って、すりつぶし遊ぶ姿が見られていた。

A 児を見ていた数名の他児もやってみようと各々でクローバーやシロツメグサを持ち寄りすりすりし始めた。でもなかなか色が出ず、不思議そうにしている B 児。でも成功体験をした A 児が「絶対になる」と言う確信があったため、周りの友達を引き連れて集中してすりすりする姿が見られていた。

補足

全然ならへんで…

クローバーは緑という経験から、シロツメグサは白と断言しすりすりし続ける様子が見られた。どれだけすりすりしても無色であったが、色がつくと信じてすりすりし続けていた。



絶対なるで

だって前になったもん

ずっとしてたらなるねん

毎日の戸外遊びの中でスリスリすることが日課の 1 つになった。戸外に出ては毎日クローバーやシロツメグサ、落ちていた木の実、畑に落ちて野菜などをすり鉢ですりすりし、どんな色が出るのかを試し遊ぶ姿が見られた。またこの時期から自発的に発言する子が増え、「お水入れたい」「袋欲しい」と保育者に伝え、遊びに取り入れる姿がよく見られるようになっていた。

これは緑やから緑になるねん！



初めは、年長児がしている姿に何か惹きつけられるものを感じ、見よう見まねで始めた姿から「やってみたい」「やっぱりできた」を繰り返していくうちに「こんなんできたらいいのにな」と自分の考えが出来る姿へと変わっていく場面がたくさんあった。自分なりのゴールを目指している子どもの姿を見守り遊びを通して何に面白さを感じているのかを意識して読み取り、自分の言葉で伝えられるように関わってきた。毎回遊ぶ度に違う色になることに不思議さよりも、楽しさ、面白さを感じ、出来上がった物を遊びに取り入れる姿もあった。

場面①「おちゃからみかんになった！！」 6 月 5 日

植物をすりすりしては「お茶の匂い！」「コーヒーの匂い！」と見立て遊びをする姿を見て、匂いに着目し、そのきっかけとしておやつのみかんの皮を置いてみることにした。いつも通りクローバーやシロツメグサを容器に入れ、すりすりを始めた K 児。隣でみかんの皮を使ってままごとをしていた F 児が、包丁で皮を切っている姿に興味を持ったものの、すりすりを続けていた。友だちの「いい匂い！」で惹きつけられた K 児は、すりすりしている容器の中に皮を入れてみた。初めはヤクルトの容器でグルグルと回しているだけだったが、「これもすりすりしてみよう」とすり始めた。「せんせい！みかんの匂いが変わった！おちゃみかん！」と匂いが変わった事に驚き、自分なりの楽しいを見つけ、もう一度繰り返していた。

緑色になるんやで！みててな！

F 児

K 児



それなに？みかん？

入れたらどうなるんやろ…

<子どもの心の動き>

やっぱり(興味・真似)

どうなるんやろ？(わくわく)

なんだこれ！？(想像と違う)

こんなになったで！(友だちと共有)

こんな出来たよ！(工夫・試す)

違うけどまあいっか！(面白さ)

もう一回初めから！(繰り返し)

～振り返り～

毎回出来上がりの違う色水に、前の方が良かったと不満げな子もいたが、楽しさを見つけ「〇〇みたい」と見立てる言葉が多く聞こえるようになり、みかんの皮のように新しい素材を入れることで、「それやったら〇〇できるやん」とやってみたい事へと広がり、自分のしてみたい事、材料を集めてはこうなるはず！という思いを持って集中して取り組む姿があった。また自分の思いを確かめる、という気持ちが見れたように感じる場面であった。

場面②「せんせい、これどんなんなると思う？」 8月1日

僕これやってみるわ！

クローバーと混ぜるの？

楽しそう♪どんなんになるの？ (保育者)

僕もする～！

わからん！

すごい！

緑の泡！！

クローバーなくなったらどーする！？

どうなるのか自分でもわからない、わくわくする気持ちがいっぱい「どうなってきた？」と何度も友だちと聞きあう姿があった。少しずつ変化が出てきたのを見て「わっ！みて！はやく！みどり～！泡がみどり！」と「自分が作った！」発見を友だちや職員に見せ、以前ジュースの見立て遊びの際に「ジュースには氷がいる」という会話があり、覚えていたのか「これ凍らせたらどうなる？」「やってみたい」と言い容器に入れていた。

場面③「このまま置いときたい！」「もってかえりたい」

①



私のすりすりしたやつはここ！！

砂混じってるけどいい？

②



見て！クローバーの氷！きれい！

③



ぼくが作った！！

せんせい！泡凍ってる！下は綺麗な氷！

上記の写真①では、「自分たちが作ったもので氷を作りたい」と、泥水やすりすりしたものをお玉と製氷機を用意し「どうなるか楽しみやな」と会話をしながら入れて凍らせたもの。写真②クローバーをすりすりしたものとクローバーそのものを混ぜたもの。写真③場面②で取り組んだすりすりしたクローバーと緑の泡を混ぜたものを凍らせたもの。

氷を見せると、こうなったという成功例を見た子供たちは「やりたい！どうやってするん？」と友だちに聞きあっている姿があった。この時こんな会話があった。

I 児「先生、このまま持って帰りたい！」→保「持って帰れるかな～？」→

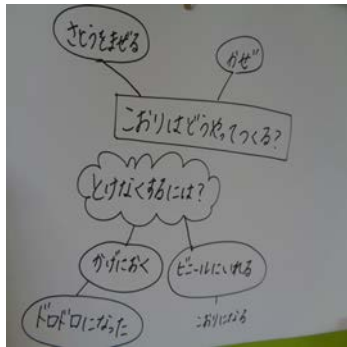
I 児「溶けちゃう…」→保「どうする？」

I 児「分かった！」と遊具のカゴの下に置いたI 児。影だと解けないと思い置いたようだ。夕方に「早く見に行きたい」と言ってカゴの下をのぞき込み取ると溶けていたが、ドロドロしていて「溶けたけどなんか違う」とじっと不思議そうな顔をみせながらも、何だか嬉しそうな顔をしていた。



～振り返り～

8月7日



上記の活動で「氷を持って帰ってお母さんにみせたい」「このまま置いておきたい」I児の「陰に置いといたら溶けへんで！ドロドロになるねん」の言葉に着目してクラスで氷について話してみることにした。『どうすれば氷は溶けないのか』から『氷はどうやって作る？』の話になり子どもらしい様々声があった。

I児「寒いところにおくねん！ほんなら溶けへん」

A児「ビニールに入れたらいいんや」

T児「砂糖を入れたら溶けないよ」

早速やってみよう！！

8月8日



砂糖をいれるよ (T児)

ちょっと？いっぱい？

う〜ん。これぐらいかな

8月20日

★普通の氷と砂糖の氷を見比べている



何かこっちの方が白い！

手がベタベタする〜



溶けた量が分かりやすいように絵の具をコップの底に塗っておいた。

赤の方が溶けてなかったのに全部溶けてるやん！！



緑…水を凍らせた氷

赤…砂糖水を凍らせた氷

初めは、緑の方が溶けるのが速く、砂糖すごい！と言っていたが結局どちらも溶け「やっぱり寒い所が好きやねん」と自分なりに納得していた。

【考察】

自分で道具を用意し、見よう見まねでしてみようと取り組む姿から、子ども達が“もっとしたい！あれしてみたい！”と夢中になれる姿が見たいと思い、すり鉢やすり棒、水など手の届くところに用意しておき子どもの気持ちが途切れないように配慮した。「やった！」「やっぱりできた！」の楽しい言葉に「どうやってやったん？」などA児の心が動いた瞬間から魅かれ出す子が増え、クラスへの遊びに広がった。こうした成功体験をたくさん経験した事から、活動の中に『探求心』が多くあったと感じた。夢中になって遊んでいるからこそ、失敗体験も諦めずに繰り返し取り組む姿に繋がっている。発展出来る様に保育者が道具などを整えたが、初めは“植物をする”という同じ行動の繰り返しだった。何日も続くその姿に着目すると、同じ行動を取っているように見えていたが繰り返しながら「前と違う」「もう一回」と思い通りにいかない悔しさを感じたり、同じではない面白さが生まれ「いいこと考えた！」と新たな楽しさへ変化している事に気付かされた。年長や年中児に「何してるん？」と聞かれた際に「これはこうやってしてんで！僕が考えてん！やってみる？」と自信たっぷりに説明をしている生き生きとした表情を見て、子どもの姿を十分に観察し、今何に夢中になっているのかを読み取り、手を差し伸べていく事が意欲を高めるための工夫につながると感じた。更に今は、『自分で作った物を凍らす』事に興味があり、遊びながら「これ凍らせたらどうなるかな？」と話したり、泥水では氷が出来るのに砂では砂が冷たくなるだけ…という思い通りに行かない事を体験し、「もう一回」と再挑戦しようとする姿も見られている。子どもの関心の強さに、私たち保育者も心を動かされ夢中で楽しんでいる事に気づき、その姿に他の園児も興味を持ち、共有することができている。結果ではなく、自分なりの楽しさの中にたくさんの何で？が生まれ、色んな方法、考えで、更に楽しさに変えていく姿を見たような気がした。これからも不思議にたくさん出会い、たくさん悩み、一緒に考え、試せる環境をこれからも作っていききたいと思う。

4歳児の事例「作った物が繋がった！～イメージを共有することで新たなひらめきにワクワクする～」

☆きっかけ☆

戸外あそび、4～5人グループが砂場で砂山を作り楽しんでいた。

場面①「高いお山作ろう」 4月中旬

「大きなお山を作ろう」とI児が声を掛けるとみんながシャベルを持ってきて協力しながらどれだけ高く出来るのか挑戦をし始めた。子どもたちは口々に「高くしたい！もっと高く！」「もっと砂を持ってきて！」と盛り上がっていた。だんだんと山が出来てきたところで砂が落ちていき、なかなか思うように高くならないことに気づき、M児が「どうしたらいいんやろう…」と言ったことがきっかけでみんなは「なんでなんやろう？」と疑問が生まれ、保育者に聞いている子どもたちだった。それでも「やり続ければ高くなると思う！」という気持ちで一生懸命シャベルで砂を運んでいる子どもの中でK児が手のひらで砂山を触っていた。それを見たI児が「そうだ！土を固く固めよう」と声を掛けたことをきっかけに斜面をたたいて固めて砂をかけて固めて…を繰り返すと、高い山が出来上がってきたことに気づき喜んでいった。

大きな山が出来てきた



高くならへん…

横をパンパンしてみるわ



出来てきた！

固めたらいいんや！

～振り返り～

始めは「高くしたい」という思いで、ひたすらにやり続けたことが自分の思うようにいかず、想像と違うことに驚いていたが、友だちの行動一つから「そうか！」と新たなひらめきで「こうしてみたらいいんや！」と子どもの中で確信が変わった瞬間が見られた。

場面②「どれくらい高くできるかな？」 4月中旬

コーナーあそびでカプラ・積み木を保育者が用意するとN児が真っ先に駆け寄ってきて組み立て始め「先生見て～さっきの山が出来た」と話していた。どうやら、みんな協力して山が作れたことを喜んでいただようだった。他の子どもも積み木に興味を持っていることが分かったので広いお遊戯室を利用して、引き続きカプラ・積み木あそびを行った。どれくらい高く積むことが出来るのか、一人で集中してやってみようとする子が多く、集中して積み上げていってもどこか不安定で途中で倒れてしまうこともあった。その中で諦めないK児は「もう一回してみる」「今度は大丈夫」と何度も挑戦する姿が見られた。高くなっていくと「すごいね」「高いなあ」とK児がしていることを褒める子がいた。その言葉をきっかけに「一緒にしよう！」と一人から二人へと増え、「ここ押さえとくね」「真っ直ぐしたら倒れへんよ」と友だちと協力して積み方を工夫する姿があった。この時はまだ高さには視点を持っていない様子が感じられた。

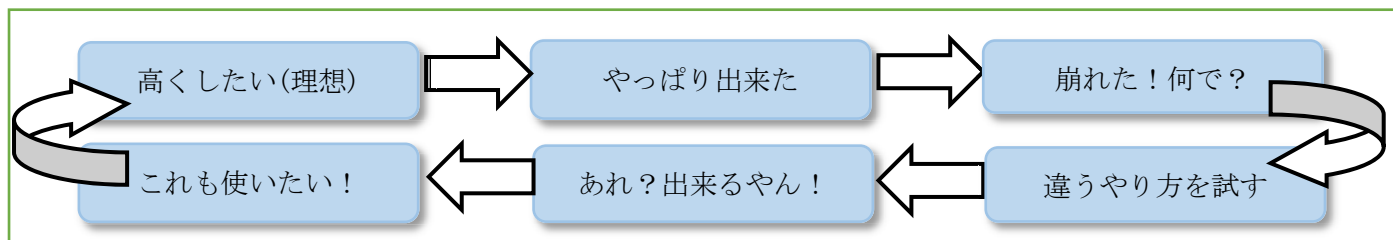
押さえてるね



グラグラ
しなくなった

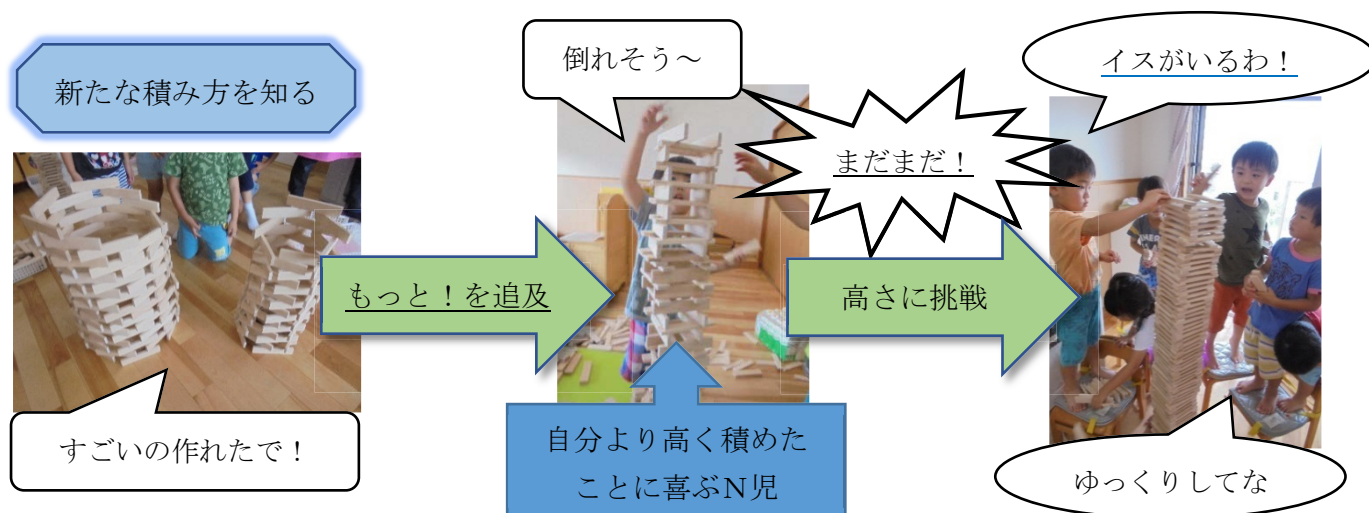
～振り返り～

高く積み上げられたK児に話を聞くと、「グラグラしてなかなか高くならへんかった」「すぐに倒れちゃった…」と一人で積み上げていた時の失敗を打ち明けた。途中でグラグラしてきて結局倒れてしまった時の原因は積み木をバラバラに置いて積んでしまったことだと気づき、その時に友だちに教えてもらった「真っ直ぐにしたら倒れへんよ」をヒントに一つ一つを丁寧に積み上げる姿が見られた。



場面③「こんな積み方もあるんやで」「まだまだいける気がする！」 6月中旬

子どもたちが見てイメージが膨らむようにと保育者が色々な形の積み方の画像を壁に掲示し環境を整えた。それを見ながら真似したN児が「上手く積みへんな…」「こんな感じちゃう！？」と何度も置き方を変えて挑戦していた。やっとのことで一段が完成！交互に重ねていき、5角形や7角形などの形で積み上げると崩れにくく、より高く積めることに驚き、「このタワーすごいんやで！」「みんなで作った」と新しい積み方を知れたことに喜ぶ姿が見られた。自分の背丈と同じくらいまでに積み上げられると「もっと高くできるのに…」「まだまだいけるけど」と悩んでいたが、A児が保育者の元へ来て、「先生！椅子持って行ってもいい？高くできちゃうんやけど！」と自信に満ち溢れた表情で伝えに来た。

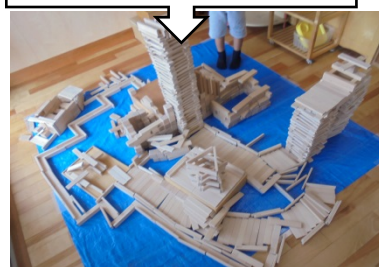


場面④「マンションの周りに何がある？」 6月中旬

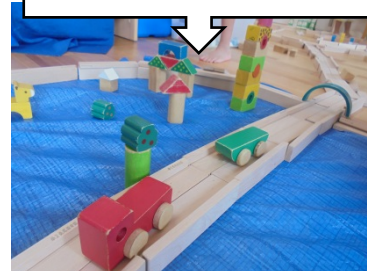
場面③で出来たマンションをもとに保育者が「周りには何があるんだろうね」と問いかけてみると「街があるんや！」「小さい家もあるし、もう少しちっちゃめのマンションもあるんやで」と3～4人の子どもが答えたので「どうしたら街が作れるんだろう？みんなに聞いてみない？」と提案してみた。クラスの子どもたちから聞くと下記のような意見が出た。ただここで問題発生。夢中で作り込んでいるときに友だちの足が当たり道路や建物の一部が壊れてしまうハプニングがあった。

- ①積み木で道を作る ②入れ物も使う ③他の玩具も並べる
- ④積み木を全部使って建物を作る ⑤色々な物で作ってみる

①積み木で道を作る



③他の玩具も並べる



～振り返り～

組み合わせ方により、階段やすべり台など色々な形に変化し、違う玩具も取り入れることで想像していたものに近づいたことに気づき、街が広がっていた。その際のハプニングで友だちが崩れてしまい失敗した経験

から、話し合いの場を設けると、振り返りの場では、何が原因だったのか皆に問うと、子どもたちから「もっと真っ直ぐ立てたらよかった」「(崩れたところは) 一回お片付けをして作り直したらいいと思う」「積み木じゃないもので作ったらいい」「そうそう！積み木より大きいやつ」など意見が出てきた。

場面④の振り返りの場に出てきた「積み木じゃないもので作る」という言葉をヒントに色々な素材の物を保育者が用意すると、「これ使いたい」と段ボールを指差した子どもたちだった。「大きいから絶対高くなるやん！」と初めから信じていて、『絶対できる！』という強い思いから「皆でやってみよう！」とさっそく作るようになった。

場面⑤高いのって何がある？

8月中旬

場面⑥ロケット作りたい！！

この頃、空・地球・宇宙のことが載っている絵本や図鑑をよく読んでいた子どもたち。「宇宙ってすごいなあ」「ロケットで飛ぶんやって」と興味を持ち、ロケットはどんな飛び方をするのか、宇宙には何があるのか等子ども同士で考え、調べる姿が見られた。(場面④振り返りのシーン) 段ボールを使って高く積み上げて出来る物は何なんだろう…

次に作ってみたいものは？
子どもの興味を引き出していくと高いのって、ロケットやんな！と意見が一つにまとまった。



絶対作れる！

さっそく段ボールを使って自分たちのロケット作りが始まった。「大きい方がすぐ宇宙行けるで！」とN児が言ったことをきかっけに大きめの段ボールを使ったり、(積み木のように細長い形のもので作ったら)



「また壊れたら嫌や」と失敗も工夫に変えている



瞬間が見られた。実際に図鑑を見ながら「こんな形やった」と大小異なる形を組み合わせて作っていた。

【考察】

場面①では、山を作りたいという一つの気持ちだけで無我夢中で高くすることの中から生まれた、思っているように高くならない不思議を“土を固める”という一つのアイデアで「こうやったら出来るんや」と発見に繋がることが出来た。そこから友だちが砂山を高く積み上げていく姿を見て僕も、私も！と砂山以外にも積み木を使った共通の遊びが広がった。また、場面③④のように次第に積み上げたものが「〇〇みたい！」「これも作ってみよう」とイメージのひらめきが弾けて、作った建物同士に橋を掛けたり、周りに道を作り一つの街をイメージして展開したり、して遊びが広がっていた。イメージを言葉で伝え合うことで「いいこと考えた」

「こうしたらどう？」と新たなひらめきが互いに作ったものを繋いでいた。一人の子どもが夢中で作ったものに「それめっちゃいいやん！」と友だちや保育者に認めてもらう事で「これでいいのかな？」という不安だった気持ちも自信に変わり、もっとこうしたいという意欲が高まっていた。みんなで作る楽しさや壊さずに作る工夫や緊張感、完成に近づくにつれての満足感を感じながら、より本格的に作ることが出来ないのか考える場面もあった。ひらめきが一つの成功例となり「もしかしてこうしたら…」「大丈夫だね」「作ってみよう」と一人一人の言動から「やってみたい！」の自発的な活動へと繋がっていたような気がした。場面⑦の身近な廃材を使って出来た自分たちのロケット。保育者も一緒に作る中で夢中になり楽しみながら作ることが出来たからこそその特別感が味わえたと感じた。子どもたちの「できた！」がたくさん聞けるように、これからも興味あるものに探求できる環境を整えていきたい。



5歳児の事例 「つながる遊び～本物みたいに作りたい！」

第1章「積み木って面白い！」 場面①「どこまで高くなるかな？」

6月中旬ごろから積み木を高く積む事を楽しんでいた子どもたち。土台の形が、「三角?」「四角?」「この形なんやろ? (五角形)」と色々と試した結果、四角形が一番作りやすい事に気付いた。



積み木たくさんいるから、高くするには積み木たりへんな～!

高く積んでいく内に、

「階段作ればいい!」と



ちゃんと押さえてるから!



高いな～!
倒れそう!

階段を作り始めた。2段から3段、4段となり、それ

以上は怖くて、高く出来なかったが、周りでは落ちない様にと『階段を押える係』『積み木を渡す係』『階段を登って積み木を重ねる係』といつの間にか、役割分担が出来ていて、最終はクラスで一番背の高い男児が選ばれ、「天井に届きそうやな!」と完成を喜び、みんなで拍手していた。次の日に保護者から、「天井まで届いたんですか?」と質問があり、子ども達が本当に楽しんでいたことが伝わってきた。

場面②「中に入りたいねん!」

7月に入って、男女のチームに分かれてどちらが高く積めるかなど、自分たちでゲームにして楽しんでいたが、7月の中旬ごろ、A児が自分の周りに積み木を重ねていく遊びを始めた。周りの子どもが「何してるの?」と聞くと「どうしても中に入りたいねん!!」と、何度崩れて失敗しても、繰り返し挑戦する姿を見ていた周りの子ども達が、積み木って重ねる以外にどんな遊びが出来るのか?どんな形が作れるのか?と興味が広がっていった。

なんで崩れるのかな?



D児: それ何?

第2章「自分たちの街を作りたい!」 1日目～3日目「何作る?一緒に作る!」

7月下旬ごろ、「USJ」「水族館」「恐竜」「地球」等々を作りたいと色々な意見が飛び交った。「Bくん、一緒に作ろう!」「私たちはディズニーランド、作るねん」と子どもたちが思い思いに話し合い、同じものを作りたい子どもたちが集まり、最終的に、「東京タワー」「スカイツリー」「東京ディズニーランド」「高速道路」を作っていくことになった。東京タワーも高くするとすぐに崩れてしまうので、壊れては修正を繰り返し、高さを工夫して作っていた。イメージが共有しやすい様に壁に、昼と夜の東京タワー等の写真を掲示すると、C児が掲示物を見てシンボルの地球と看板を何で作るのかを考えて、ビニール袋で地球の丸みを作り水色のガムテープで地球の色に見立てた。転がりやすい事に気付き、土台を作った。また、C児とE児が「積み木の東京タワーも光らせたい!」と考え、カラーセロハンで作りはじめた。電気の様につけたり消したりは難しかったので、「昼です」「夜です」とつけたり外したり出来る形になっていた。それぞれ個々の子ども達の、こだわりを持って、作っていく姿が見られた。



C児: ディズニーランドの入り口にあるやつやん!

- ・子どもたちが伸び伸びと、積み木あそびが出来る様に、場を整え広い空間を作っていた。
- ・作りたい時に作りたい物を作る様に、コーナーの廃材や素材を補充しておく。
- ・作りたい物を知らない子どもとの、イメージの共有が出来る様に、壁に写真を掲示しておいた。

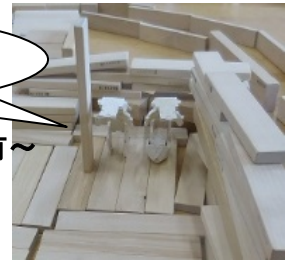
5日目～「博物館も作る!」

次の日には、もともと LAQ で遊ぶ事が好きで、恐竜や骨や化石、古代の生き物を作っていた F 児が、「博

博物館も作りたい！」と新しい建物が増え、

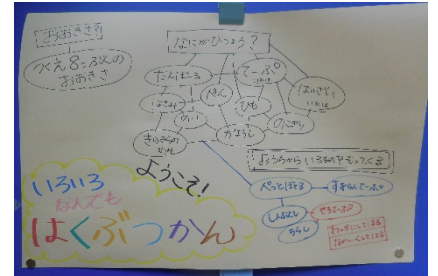
博物館って他に何があるのかな？

今までに作った物も置いて遊ぶ姿が見られた。



第3章「本物みたいに大きくしたい！」場面①「それ知ってる！」～イメージの共有～

8月に入ってから遊びが継続されている中、夏休みに「昆虫博物館」に行ったG児の話から、C児やF児などが、自分たちも「恐竜博物館」に行ったことがあると話が盛り上がり始め、「大きな恐竜を作りたい！」と言い始めたので、みんなで話し合いをしてみた。博物館といっても色々な種類の博物館があるのでどんな博物館に行ったのか？の発表から始まった。男児は昆虫や恐竜が多く、女児は行ったことがある子どももいたが、兄弟といたのであまり興味はない様子だった。でも化石の話になった時に、C児が「水族館に行ったときに、大きい魚があった！」と教えてくれて、他の女児も「それは知ってる！」とクラス全体の活動になっていく、きっかけとなった。どんな物を作るのか？作るだけでいいのか？など話も進んでいき、全員が共有出来る様にウェブに書いていった結果、「いろいろなんでも博物館」を作って違うクラスの子も達や保育士、保護者に見せたいと話がまとまっていった。



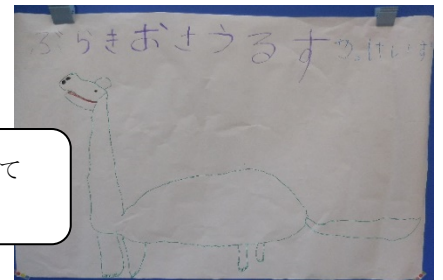
場面②「どうやって作る？」～設計図作り～

何を作るか？の話し合いでは「ブラキオサウルス」「化石」「クジラ」などの意見が出てきて、「本物みたいな作るの？」「骨とか作るの？」「どうやって作るっか？」などの話し合いが行なわれた。

話し合いで決まった事

- ・ブラキオサウルスを作る・大きさは、お部屋の机8個分
- ・保育園にない物で使いたい物は、保護者に協力してもらって、家から持ってくる
- ・パーツ毎に、分担して作る

子どもが絵を描いて
作った設計図



各パーツ毎の作成過程

すずらんテープは「黄緑」と「緑」

首の作成



- ・ペットボトルの底を切る
- ・切った断面はガムテープで貼る
- ・中にすずらんテープを入れる
- ・たくさん作って、つなげる

ペットボトルの底は
カッターで切断した。
切った断面が「危ない
なあ、手、ケガする」
とH児が言ったので、
テープを貼る事になった。
(以前の遊びの経験から)

「すずらんテープがコロコロ転がるから、ペットボトルの中に入れてくいなあ」と制作中にI児が言うのと「もっておくわ！」と周りにいた子どもが先をもって協力して作る姿が見られた。

顔の作成



- ・ティッシュの箱を使う・ガムテープで貼りつける
- ・目はペットボトルのふたとモール
- ・舌はキッチンペーパーの芯と花紙
- ・鼻はマスキングテープの芯

この筒で
支えるな！



顔と首とつなげる時に、上手くつなげられずに、テープで貼って落下して、ガムテープで貼ったが上手くいかず試行錯誤していた時に、博物館に行ったことのあったF児が、「分かった！恐竜のを飾ってあるところでは、下にこんな風に支えてあるのがあった。階段みたいに登れるのもあったで」とアイデアを出した事で、なんとかつなげる事ができた。

足の作成

こっち持ってるからテープして！

これで、足が太くなるなあ〜。

前足 ・太めの芯材（2本）
後ろ足・長めの芯材（2本）
・ペットボトルをくっつける

制作中に図鑑を見ていや子どもが、「ブラキオサウルスの足、前足より後ろ足の方が太いな〜」と言ったことで、後ろ足のみ芯材にペットボトルをくっつけて、太さを表現してみる事になった。

体の作成

体は段ボール箱が長細かったので丸みを表現する

・大きめの段ボール箱・画用紙（緑）
・新聞紙やチラシを丸めてガムテープで貼りつける

方法を考えて、新聞紙やチラシを丸めてたくさん貼り付け

ていく方法を思いついた。その中で、重さで落ちてしまうものもあったがその都度テープで補強していった。



場面③「大きくなったなあ〜！！でも…？」

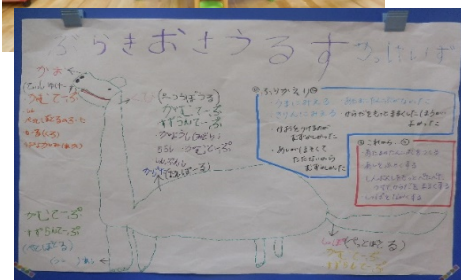
すべてのパーツが出来上がって、組み立て作業になった。思っていたよりも体や顔が大きくて重くて、足だけでは支えられなかったので、かおを支えた要領と同じようにして、体も階段を作って支える事になった。以前の経験から、すぐに階段が出来て、体を支える事が出来た。すべてを繋げ終わって、みんなで出来た喜びを感じていたが、保育者自身が感じていたこともあったので、子ども達に感想を聞いてみた。「難しかった」「時間がかかった」「大きく作れて嬉しい」「もっと大きくしたかった」などいろいろな意見が出る中で、J児がボソッと「馬みたい…」と言ったことで、「ほんまや！馬に見える」「キリンにも見えるなあ」との思いも聞かれたので、全員でなぜなのか？検証してみた。

検証結果（振り返り）

- ・馬みたい ・キリンみたい（なぜ、馬みたいに見えるのか？）
- ・足がまだ細い気がする ・頭にこぶをつけるのを忘れてる
- ・頭が下向きやから？でも上向きにしたかったけど無理やったからこれからどうしたい？
- ・頭にこぶをつけたい ・しっぽももう少し長くしたい
- ・体にもっと新聞紙を丸めてつけて増やす ・足を太くしてみる



完成！？



【考察】

今回の事例では、各活動の中に子ども達のこだわりがたくさん見られた。そのこだわりは小さな物（顔を上に向けたい）から大きな物（足を動かせる様にしたい）まで様々だったが、自分たちが作りたい！と思った時に、「どうやって作ろう？」「思うように出来ない…」など工夫が必要な場面がたくさんあった。自分たちで作っていきたいという思いが、探求心へと繋がっていったのではないかと感じた。最後の過程で、パーツをつなげていく時は、どんな風になるのか？とワクワクしながら作っていて、子ども達がいきいきとした目をして活動していた。その中でも様々な疑問や出来ない！という思いが出てきたが、友だちと「こうしてみよう」「これを使ってみよう」と工夫して、試行錯誤を繰り返していた。最後にみんなで振り返った時に、自分たちで描いていた「ブラキオサウルス」とは違っていたが、それを失敗をとらえずに、「じゃあこうしていこう！」と前向きに笑顔で話し合っている姿も見られ、子どもたちのやる気やこだわりたいという強い思いも改めて感じた。そういう子ども達のこだわりや思いを尊重していけるように、保育の環境など、事前に行える事を行い、保育者も子どもたちと一緒に目線で考え、楽しめる様な保育をしていきたいと思う。

全体的な考察

下記の図1では、各クラスごとに、「不思議・発見・探求心」を分類し、その数を記入した。また、保育者が場面ごとの中で子どもたちと夢中になっていた瞬間を記入した。全クラスで、「不思議」と感じる場面が42あった。遊びを「発見」したり、遊びの方法を発見したりした場面は、63あった。子どもたちが、もっとやりたい、こうしたらどうなるのか？面白そう！など遊びを追求していく「探求心」は71あった。今回もっともエピソードに多く出た場面は「探求心」であるが、各クラス毎で見えてみると、発達に応じているクラスもあり、探求心が全クラス多いわけではないが、面白そう！と思う事をきっかけに失敗したり修正したり、新しい遊びに広げていく中に、自園が考える科学する心は含まれており、また保育者も子ども時代に戻った瞬間のような感覚（夢中）を味わっていることがわかった。

図1

クラス	不思議	発見	探求心	クラス	不思議	発見	探求心
0歳	8	9	3	3歳	8	19	25
1歳	7	6	14	4歳	12	14	16
2歳	5	8	6	5歳	2	7	7
保育者が夢中になる瞬間・保育							
0歳児	保育者の真似をして遊びはじめたり、自分でだんだんできるようになってきて、自分で考えて試している時、新しい物に出会ったり、できそうでできないことに挑戦しようとしている時。						
1歳児	ペットボトルに張った水の中に花びらや梅の実を入れ、ジュースとして見立てて遊びが広がり、さらに保育者も一緒になって探索することを楽しんだり、浮かぶ花びらや梅の実、色の変化を一緒になって楽しめた時。子ども達と簡単なジュース屋さんごっこを楽しんでいる時。筒の中に転がる物を子ども達と一緒に探している時。子ども達が身近にある物で転がる物転がらない物を見つけ一緒になって探求している時。						
2歳児	こんなふうなケーキが作りたいという思いが子ども同士も保育者も共有ができ、次へと繋がった時、子ども達のやりたいことが見えたり、遊びが広がった時にそれに合った素材を用意した時。子どもがやりたい事を問いかけ、周りの子ども達との仲介役になった時、保育者が一緒になって泥水を作り、試行錯誤する瞬間。						
3歳児	子ども達が自分から進んで取り組む姿に保育者も惹かれ、いつの間にか子どもと会話が弾み、保育者が夢中になって遊ぶ姿が今回の事例にいくつもあった。「思い通りにいかない、思っていたのと違う」という場面に出会った時、諦めずに何度も挑戦し、楽しむ子ども達に勇気をもらい保育者も夢中になっていた。						
4歳児	「やりたい」の気持ちに寄り添い言葉がけを行っている瞬間、次の目当てに向かって進める子ども達の姿に「やり遂げてほしい」と一緒になって夢中になれた。積み木で失敗した経験を活かし段ボールを友達と協力し工夫しながら制作をし「ぼくはこうしたい」「わたしはこうしたい」と思いがある中、組み合わせると「ロケット出来てきた！」とイメージが広がり「もっとこうしたら？」「〇〇も必要やん！」と保育者や友達全員で話合う事ができ、制作出来た。						
5歳児	次々としたらいいアイデアが出てきて、どこまで高く出来るのかな？と思って見守っていた時。全てのパーツを繋げた後、「あれ？馬みたいに見える？」と子ども達と意見が合ってどうしたらいいか一緒に考えた時。						

最後に、今後はこの「不思議・発見・探求心」をベースにさらなる研究を深めていきたいと考える。そのために、保育者と子どもたちが夢中になって遊びを深めていく保育を子どもたちと共に考えながら、明日に繋がる保育を目指していきたいと考える。